学　会　記　事

第2回新潟外科系領域 バイオメディカル研究会

日　時　平成3年6月14日（金）
午後6時～午後8時
会　場　ホテル新潟　3階
飛翔の間

I．一　般　演　題

1）肺外科領域におけるベリプラストPスプレーの使用経験

中山　健司・広野　達彦
大和　　靖・相馬　孝博
吉谷　克雄・土田　正則
江口　昭治　（新潟大学第二外科）
小池　輝明　（県立がんセンター新潟病院胸部外科）

患者の高齢化に伴い気腫性変化の強い症例も増加し，肺外科領域では術後 air leak に悩まされることがある．我々は術中に肺の切除断端或は縫合部よりの air leak 部にベリプラストPスプレーを塗布したところ leak が消失し術後管理が容易になった症例を経験したので報告する．

症例1は72歳の女性，肺結核腫の診断で右肺部分切除を行った．不完全分葉の葉間部より air leak を認めたため同部にベリプラストPスプレーを塗布した．

症例2は66歳の男性，狭心症合併肺癌の診断で冠動脈バイパス術と右上葉切除術を同時に行った．中，下葉との剝離面より air leak を認め同スプレーを塗布した．

症例3は76歳の女性，再発肺癌の診断で右 S6 区域切除を行った．切除断端よりの air leak 部にスプレーを塗布した．

ベリプラストPスプレーは sealing 効果が確実で裏面への塗布も可能であり，肺手術後の肺胞瘻防止に有効と思われた．

2）肺癌縦隔リンパ節郭清後，縦隔への fibrin glue 塗布による術後胸水量減少効果の検討

山口　　明・相馬　孝博　（国立療養所西新潟病院外科）

肺癌手術後の多量胸水は，ドレイン抜去時期を遅延させ，感染機会の増大，低蛋白血症をもたらす要因となる．こうした合併症を予防する目的で fibrin glue を縦隔リンパ節郭清部位に塗布し，術後胸水量が減少するかどうかを検討した．胸膜癒着がなく，合併切除を要さず，術後 air leak が無かった R2 以上の縦隔リンパ節郭清を施行した肺癌患者で検討した．fibrin glue 塗布群9例，非塗布群10例で，ドレイン抜去時期，全胸水量を比較したが有意差は無かった．fibrin glue の使用量が少なかったか，あるいは，塗布群に手術侵襲の大きい症例が多かった可能性があり，再検討を要すると思われた．

3）ベリプラストP使用による心膜癒着防止効果の実験的検討

諸　　久永・大関　　一
江口　昭治　（新潟大学第二外科）

近年，再手術例の増加に伴い，心膜癒着に対して，集学的研究の必要性が求められているが，今回，ベリプラストによる心膜癒着予防が可能かを動物実験にて検討した．積極的に癒着促進を図った後，塗布および散布法にて検討した．非塗布群では 3W，4W 例に繊維性の強い癒着と，心外膜・心膜側からの著しい細胞浸潤，血管新生，強い fibrosis を認めた．ベリプラト群では，肉眼的にゲル状・fibrin 様物質にて心外膜側は覆われ，著しい心膜癒着は認めず，徒指にて容易に剝がれた．組織的には，心膜・心外膜間には loose な fibrin net が形成されるも，著明な細胞浸潤や血管新生は認めなかった．人工素材縫着部では，異物反応や器質化が生じているも，心膜との著しい組織反応は認めなかった．以上から，ベリプラスト塗布方法によっては，心膜癒着防止効果は期待可能と考えられた．

4）子宮頸部円錐切除術の切断端処理について

児玉　省二・本間　　滋　（新潟大学産婦人科学教室）
金沢　浩二・田中憲一

当科では，昭和63年以降の子宮頸部の円錐切除術は CO_2 レーザによる手術を行い，切断端は開放としてきた．切断端の出血例には，Microfibrillar Collagen Hemostat を使用した．レーザー手術の利点としては，非照射部位の組織損傷が少なく，残存部位からの出血が少なく，滲出液が少なく感染が起きにくく，創傷治癒が早いこと，などがあげられる．円錐切除術の適応は，診断目的として頸管内病変で病巣の把握が困難例および初

期腺癌の疑い例，治療目的として高度異形成および上皮内癌例である．現在までに，71例の円錐切除術を行い，経過観察38例，子宮摘出追加33例を経験した．創傷治癒は，術後約8週間を要し，間質組織の増成と頸管円柱上皮および扁平上皮の浸出が認められた．子宮温存例の3例が妊娠し，1例の満期分娩を経験している．

5）胸部食道癌切除再建術における頸部吻合法の検討

若桑　隆二・和田　寛治
田島　健三・松田由紀夫
岡村　直孝・名村　　理
八木　伸夫
（長岡赤十字病院 外科）

胸部食道癌切除再建術における吻合操作は，全身的，局所的な特殊性から他の消化管吻合に比べ縫合不全の発生率は高いと考えられる．

我々は，過去2年間に40例の胸部食道癌切除再建術をおこない，その頸部吻合法につき検討したので報告する．

縫合不全は6例（15.0％）に認め，吻合部狭窄は2例（5.0％）に認めた．縫合不全の発生は再建臓器や再建経路では有意差を認めなかった．最近は器械吻合例が多いが，器械吻合21例中5例（23.5％）に縫合不全を認め，手縫い吻合（2列層々吻合）では1例（5.3％）であった．術後肺合併症と縫合不全の発生には有意差（$p<0.01$）を認め，術後管理の重要性が示唆された．確実な操作による吻合が望まれる．

Ⅱ．特　別　講　演

手術と創傷治癒，消化管吻合での研究方法

国立がんセンター外科部長
丸山　圭一 先生

第12回新潟高血圧談話会

日　時　平成3年11月22日（金）
午後6時～
会　場　新潟大学有壬記念館
2階大ホール

Ⅰ．一　般　演　題

1）郵政職員における冠動脈検診の結果

山本　明彦（新潟逓信病院）

郵政職員において，血圧に影響を与えると思われる，年令，Body Mass Index，食塩摂取量，アルコール摂取量，喫煙量の5因子について，血圧に対する影響度を検討した．さらに上越地方一農村と比較し，生活習慣の相違による血圧の差についても検討した．対象を平成元年度に今回の調査を希望した新潟市男性郵政職員359人と一農村男性住民300人とし，健康診断時に，生活習慣アンケート調査および栄養士による栄養聞き取り調査を施行した．新潟市男性郵政職員では，収縮期血圧は Body Mass Index，アルコール摂取量，年齢と相関し，食塩摂取量，喫煙量とは相関しなかった．拡張期血圧は Body Mass Index と相関し，他とは相関しなかった．また農村男性住民の高血圧者の割合は36.4％と，新潟市男性郵政職員の18.4％に比し有意に高かったが，その原因として食塩摂取量の多いことが関与していると考えられた（農村住民平均15.2 g，郵政職員平均10.8 g）．

2）心電図，血圧などの二世代にわたる観察

江口　晃（NTT長野病院 新潟健康管理所）

電々公社時代より NTT にかけて在職した60組の同性の親子の心電図を比較した．親の平均年令48.9歳，子の平均は40.5歳であった．RR 間隔より求めた心拍数，PQ 間隔，QT 時間は親と子の間に有意の正の相関を認めたが QRS 巾は有意の相関を認めなかった．

また47組の同性の親子（親の年令の平均39歳，子の年令の平均38.3歳）について血圧，身長，体重，心胸比を比較した所，収縮期血圧も拡張期血圧も親子の間に有意の正の相関が見られた．身長，体重についても血圧と同様正の相関があり遺伝の関与が明瞭であった．

子の身長，体重は親よりそれぞれ平均6 cm，5 kg 大きく食生活，社会環境の影響が考えられた．また胸部X